

令和6年第1回一都三県サバ漁海況検討会
令和6年漁期サバたもすくい網漁、棒受網漁の見込み

令和6年1月11・12日

参加機関：東京都島しょ農林水産総合センター、神奈川県水産技術センター、静岡県水産・海洋技術研究所、千葉県水産総合研究センター

協力機関：水産研究・教育機構水産資源研究所、茨城県水産試験場、漁業情報サービスセンター

1 予測

(1) 海況

【予測（2024年1～6月）】

黒潮大蛇行が継続し、A型基調で推移する。

蛇行北上部は概ね伊豆諸島海域の西側に位置し、伊豆諸島北部海域（大島～利島及びひょうたん瀬）、三宅島及び銭洲海域はいずれも概ね暖水に覆われる。沿岸水温はいずれの海域も「高め」～「極めて高め」で推移する。房総沖では、接岸傾向で推移する。沿岸水温は「平年並」～「やや高め」で推移する。

漁場水温は、伊豆諸島北部海域では1月中旬は20～22℃、同下旬～2月上旬は19～21℃、同中下旬は20～21℃で推移する。三宅島付近では1月中下旬は21～22℃、2月は20～21℃で推移する。銭洲海域では、1月中旬～2月上旬は21～22℃、同中旬は21℃、同下旬は20℃で推移する。

なお、三陸から常磐沿岸には1月中は16～18℃の暖水が分布する。

【説明】

1月10日現在、黒潮は御前埼から石廊崎沖を北上した後に銭洲付近で向きを北東に変え、三宅島付近を通過し、房総沖を接岸して北東へ流れている。水温は、伊豆諸島北部海域は20～21℃、三宅島周辺は21℃、銭洲海域21.5℃になっている。

黒潮は期間を通じてA型で推移する。蛇行最南下部から駿河湾～石廊崎沖を北上した後、銭洲付近で向きを東～北東に変え、伊豆諸島北部や三宅島付近を通過する。このため、これらの海域では例年よりも漁場水温が上昇し、20℃以下になりにくい。房総沖では概ね接岸傾向で推移し、離岸は一時的である。また、黒潮からの暖水に覆われやすい。

なお、1月中旬～2月下旬の水温は水産研究・教育機構水産資源研究所の海況予測システム（FRA-ROMS II）等を参照した。

海況予測の考え方

黒潮流路については、12月の長期海況予報を参考にする。

2か月後までの黒潮流路及び水温は、FRA-ROMS II等を参考にする。ただし、現況を優先する。

大蛇行型の場合

- ・漁期中はA型流路（A型は継続期間が長い）
- ・伊豆諸島海域は、水温高めで推移

非大蛇行型の場合

- ・西の小蛇行の位置と規模を確認する（都井岬に蛇行部があれば、2～3か月後に伊豆諸島海域に到達する）。
- ・4月以降は長期予報のとおり。
- ・N型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」～「平年並」、三宅島付近は「平年並」～「高め」。野島埼沖の黒潮離岸距離は「平年並」。
- ・B型流路の時、伊豆諸島北部海域は「高め」～「極めて高め」、三宅島付近は「高め」～「極めて高め」。野島埼沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「やや接岸」。
- ・C型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」で暖水波及時に一時的に「高め」、三宅島付近は「低め」。野島埼沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「著しく離岸」だが、伊豆諸島の東をS字に北上する場合には「接岸」。

(2) 漁況

①マサバ

【予測 (2024 年 1~6 月)】

(ア) 来遊量と漁獲量

3 歳魚 (2021 年級群) は前年を上回る。4 歳魚 (2020 年級群) は前年を上回る。
5 歳魚 (2019 年級群) は前年を下回る。6 歳魚 (2018 年級群) は前年を上回る。
全体としては低調であった前年並。

(イ) 漁期・漁場

初漁は 2 月中旬に伊豆諸島北部海域 (大島千波~大室出し) となる。主漁場は漁期を通して伊豆諸島北部海域となり、黒潮流路によって一時的に銭洲周辺海域及び三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

(ウ) 魚体

28~34cm (4 歳魚) 主体に漁獲される。
※年齢は年初に加齢し 2024 年時で表す。魚体は尾叉長で表す。

【説明】

漁期当初のマサバ推定来遊資源量・漁獲量

来遊資源は、加入量が近年 (最近 10 年) の平均程度の水準である 6 歳魚 (2018 年級群) と近年の平均を下回る水準の 5 歳魚 (2019 年級群) 及び加入量が近年の平均程度の水準の 4 歳魚 (2020 年級群) が主体になると考えられる。

6 歳魚 (2018 年級群) は、近年の平均程度の加入量であるが、6 歳魚の残存資源尾数は前年を上回ると推定された。

5 歳魚 (2019 年級群) は、近年の平均を下回る水準の加入量であり、残存資源尾数は前年の 5 歳魚を下回ると推定された。

4 歳魚 (2020 年級群) は、近年の平均程度の水準の加入量であり、残存資源尾数は前年を上回ると推定された。

卓越的な加入量であった 2013 年級群以降、過去の高水準期と比較して成長は遅くなっている (由上ら「令和 3(2021) 年度マサバ太平洋系群の資源評価」)。

この成長の遅れに伴い成熟開始年齢の高齢化がみられており、2016 年漁期以降の年齢別成熟割合は、2 歳魚は 0%、3 歳魚は 30%と仮定した。

各年級群の状況を考慮した上で、2024 年 1 月当初におけるマサバ来遊資源量 (3 歳魚の一部と 4 歳以上) は、漁獲状況の悪かった前年を上回ると推定された。

海況は、前年と同様に黒潮流型は A 型基調で推移すると予測されていることから、漁獲割合 (漁獲量/来遊資源量) は同じく A 型で推移した 2019~2023 年漁期平均の 0.22%であると仮定すると、漁獲量は 3,012 トンと試算される。また、近年漁船勢力が減少していることを考慮し、直近 2 年の平均値 (0.09%) を適用した場合は、漁獲量は 1,225 トンと試算され、いずれも前年を大きく上回る (前年比 211~523%) と考えられる。

マサバ来遊資源量には3歳魚の一部が計上されているが、2023年10～11月の北部まき網漁業による銚子水揚げ物の明け3歳魚（2021年級群）の尾叉長は、26～30cm主体であった。近年のマサバ太平洋系群の成長は遅くなっており、成熟開始年齢の高齢化も見られる。伊豆諸島海域への回遊は産卵回遊であり、現在3歳魚の成熟割合は30%と仮定されているが、想定以上に成熟率が低い場合には伊豆諸島海域への3歳魚の来遊量は少ない可能性がある。また、後述するように、1月上旬時点における南下群の所在は明らかでなく、今漁期の海況は魚群の南下を妨げている可能性があると考えられ、推定された漁獲量（1,225～3,012トン）は過大評価の可能性はある。

初漁日、漁場

北部まき網漁業の2023年12月中下旬の漁場は、常磐南部～犬吠埼沖であり、2022年12月中下旬（三陸南部～金華山沖と鹿島灘沖～犬吠埼沖）よりも南に形成された。2023年12月の緯度経度5分ごとに集計した漁場水温の平均は18.4℃であり、2022年12月平均（16.8℃）より高く、2018～2022年平均（15.9℃）よりも高かった。2024年1月9日夜の漁場は鹿島灘沖～犬吠埼沖が主漁場であり、2023年1月上旬（常磐北部）よりも南に形成された。漁場水温は、16.9～17.1℃であり前年同期（17.8℃）より低かった。2023年度第2回太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報によると、房総沖は黒潮からの暖水に覆われやすく、沿岸水温は「平年並」～「高め」と予測されている。

12月以降現時点（1月12日）まで、鴨川市漁協所属のハイカラ釣漁船は出漁していない。

千葉県漁業調査船ふさみ丸によるハイカラ釣り調査は、今年は1月10日に実施され、22～26cmのゴマサバを主体に22～28cmのマサバが混じって釣獲された。

また、外房沿岸の定置網では1月8日にゴマサバ1トン程度が漁獲されたが、マサバは漁獲されなかった。南下群と思われる大型マサバの入網は確認されていない。

さらに、千葉県の民間船1隻が1月8日夜に行ったたもすくい網漁では、大島千波で6.9トンのゴマサバを漁獲したが、マサバはわずか14kgであった。

これらのことから、2024年1月12日現在、マサバ南下群の先端はいまだ三陸南部海域と見られるが明確でなく、魚群の本体は鹿島灘沖～犬吠埼沖周辺海域には滞留していないものと考えられる。

2024年1月12日現在、神奈川県、静岡県の調査船による調査は行われていない。

以上、関連情報は少ないが、1月上旬時点では、南下群の主群は所在が明らかではない。前年12月末時点で黒潮続流は犬吠埼沖から三陸南部海域にかけて接岸傾向であったため、同海域での魚群の南下は妨げられていた可能性があり、南下は例年より大幅に遅れていると推定される。水研機構の海況予測モデル（FRA-ROMSⅡ）によると、1月中旬に三陸南部海域まで北偏していた黒潮続流が暖水塊として切り離され、黒潮続流の本流は犬吠埼沖で接岸した後、東に流去する可能性がある。一方、伊豆諸島海域では、FRA-ROMSⅡや気象庁のモデルによると、少なくとも2月下旬まで黒潮は銭洲～三宅島付近を東方向に流れ、同海域は暖水に覆われやすい。親魚量の増加傾向

が顕著となった 2013 年漁期以降、三宅島周辺海域が初期漁場となっていたが、2020 年漁期は同海域が黒潮流路内にあったことから北部海域が初期漁場となった。また 2016 年漁期以降では、盛漁期には過去の高水準期と同様に、銭洲周辺海域でも再び漁場が形成されるようになった。

漁場水温は、伊豆諸島北部海域では 1 月上中旬は 19～21℃、同下旬～2 月上旬は 19～20℃で推移する。三宅島及び銭洲周辺では、1 月上中旬は 21℃、同下旬は 20～21℃、2 月は 20℃で推移する。

以上のことから、昨年と同様、2 月中旬以降に伊豆諸島北部海域で初漁になると考えられ、その後も黒潮は伊豆諸島海域の西側を北上した後、銭洲～三宅島付近を東進するため、伊豆諸島北部海域が主漁場となる。一時的に黒潮が南偏し、黒潮からの暖水波及が弱まると、一時的に銭洲周辺海域や三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

魚体

伊豆諸島海域へ来遊するマサバは主に 2 歳以上であったが、2013 年級群以降、成長の遅れが顕著となり、成熟するのは 3 歳魚の一部と 4 歳以上となっている。

北部まき網で 2023 年 11 月に漁獲されたマサバは、25～29cm の明け 2 歳魚（2022 年級群）～明け 4 歳魚（2020 年級群）が主体となり、30～38cm の明け 3 歳魚（2021 年級群）以上が混じった。

12 月は 22～29cm 前後、体重 200g 以下の魚体が漁獲の主体であり、30cm 以上の魚体はわずかであった。

今漁期初めの魚体は 30cm 以上の明け 5 歳魚（2019 年級群）以上が主体となる。その後、28～34cm の明け 4 歳魚（2020 年級群）が主体になると考えられるが、前年 11～12 月の主たる漁獲サイズは 28cm 前後の明け 3 歳魚であり、4 歳魚以上の来遊は少ない可能性がある。明け 3 歳魚（2021 年級群）は 30cm 以下がほとんどであり、伊豆諸島海域への来遊は少ないと考えられる。35cm 以上の大型魚の来遊は少ないと考えられる。

北上期

漁期終盤にマサバ主漁場への 20℃以上の暖水波及があるときは、北上が開始される。近年、4 月に入ると、1 夜 1 隻平均漁獲量が減少する傾向がある。黒潮は予測期間中 A 型で推移するが、4 月以降の北上流路の位置は現時点では不明であり、近年の傾向から判断した。なお、伊豆諸島より西方の海域（熊野灘など）に回遊した大型魚は、5 月以降に来遊する傾向がある。

【マサバ予測の考え方】

漁期当初のマサバ推定来遊資源量

昨年6月末時点のマサバ資源尾数から、7～12月の漁獲尾数及び自然死亡尾数を減じた尾数を年末時のマサバ資源尾数とする（水研機構データ）。これに、各年齢の平均体重を乗じた量を資源量とする。そのうち、4歳魚以上と3歳魚の一部を産卵親魚と考える。

漁獲量

漁獲割合（推定来遊資源量に対する漁獲量の比率）は、2000年代前半は0.05%以下で推移していた。2011年以降の漁獲割合は0.06～0.91%の間で推移しており、直近5か年（2019～2023年）の平均漁獲割合は0.22%である。

初漁日、漁場

- ・ 漁期初めの1～2月におけるマサバの集群は、黒潮系暖水の影響下（16℃以上）の瀬にみられ、漁場が形成される。【過去10か年（2014～2023年）の初漁時の漁場水温（海面）は15.2～19.6℃（平均17.8℃）】
- ・ 2012年までは、漁期初め（産卵期前、1、2月）の漁場は、ほとんどがひょうたん瀬～大室出しであった。【2013～2015年は北部海域が低水温となり、三宅島周辺海域で初漁がみられた。産卵盛期には、三宅島周辺海域に漁場が形成されることが多い。】
- ・ 親魚量が増加傾向にある2016年漁期には、初期漁場は三宅島周辺海域、盛漁期には銭洲海域にも形成された。過去の親魚量高水準期にも同様の傾向が見られた。
- ・ 漁期後半は、北部海域が主漁場となる。【ただし、北部海域が継続して冷水域に覆われると、三宅島周辺海域で漁場形成が継続する。】
- ・ 犬吠埼以北の水温が高いと南下しない場合がある。【2008年漁期は1、2月に常盤海域～鹿島灘に暖水が波及していたため、南下しなかった。】
- ・ 2019年以降の初期漁場は北部海域の利島もしくは大室出しで漁場形成されている。2017年からの黒潮大蛇行期以降、黒潮が銭洲～三宅島周辺海域を通過することが多くなり、漁期初めには、北部海域に適水温帯が形成されることが多くなった。

漁況

中熟期は水温が16℃を超える暖水が波及する瀬に、産卵盛期には18～20℃の暖水が波及する瀬に集群して、好漁となる。

魚体

漁獲物の体長組成から、大型個体が小型個体より先に来遊する。漁期終盤には、大型魚の割合が増える。

北上期

伊豆諸島海域の水温が20℃以上になると北上を開始し、漁場が消滅する。伊豆列島線上の5、6月における黒潮流軸の水温は22℃から25℃に昇温する時期であるため、伊豆諸島海域が冷水渦に覆われる場合は漁場が継続する（例：2007年漁期）。

その他

予報及び漁況経過における前年比の目安は表1のとおりとする。

表1 来遊量及び漁獲量の評価の目安

予報	前年比	漁況経過	前年比
前年を下回る	-20%以下	前年を大きく下回る	-20%以下
前年並	-20%より大きく+20%未満	前年を下回る	-20%より大きく-10%以下
前年を上回る	+20%以上	前年並	-10%より大きく+10%未満
		前年を上回る	+10%以上+20%未満
		前年を大きく上回る	+20%以上

【マサバ資源管理】

マサバの資源量は1990年頃から低迷が続いていたが、2013年級群が卓越して高い加入量であったことから、資源量、親魚量とも増加傾向が続いていた。また、昨年まで2018年級群は2013年級群を上回る加入尾数と推定されていたが、現在は近年の平均程度の水準と推定されている。2023年度さば類資源評価会議では、マサバの資源量は減少局面に入った可能性が示された。

2023年度の資源評価では、親魚量は減少傾向とされ、親魚量の水準はMSYを実現する水準を下回り、漁獲圧はMSYを実現する水準を下回ると判断された。このことから、今後安定的に親魚量の維持、増大、加入量の安定を図るためには、引き続き未成魚の保護をはじめとした管理措置が重要である。

②ゴマサバ

【予測（2024年1～6月）】

（ア）来遊量と漁獲量

前年を下回る。

（イ）漁期・漁場

期間を通じて、伊豆諸島北部海域（大島千波、利島等）に漁場が形成される。黒潮流路によって、一時的に銭洲周辺海域や三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

（ウ）魚体

尾叉長 28～35cm の 3 歳魚（2021 年級群）、33cm 以上の 4 歳（2020 年級群）以上を主体に、27 cm 以下の 1 歳魚（2023 年級群）、26～31cm の 2 歳魚（2022 年級群）が混じる。※年齢は年初に加齢し 2024 年 1 月時点を表す。

【説明】

来遊量と漁獲量

全年級群を合わせた来遊水準の予測には、年別の 1～6 月と前年の 7～11 月棒受網 CPUE の相関関係（図 1）を使用した。今回の予測期間（2024 年 1～6 月）における来遊水準は、前年の 7～11 月棒受網 CPUE（3.2 トン）の値から 6.9 トン（前年同期 10.6 トン）と推定され、来遊水準は前年を下回ると考えられた。また、1～3 歳魚の年級群別の来遊予測には、令和 4 年度ゴマサバ太平洋系群資源評価において示された親魚量（SB）と、MSY を実現する水準となる親魚量（SB_{msy}）の比（以下、SB/SB_{msy}）を用い、SB/SB_{msy} が 1 以上と 1 未満の年に分け、それぞれに対して回帰直線を引いた（図 2）。その結果、SB/SB_{msy}<1 の年の年級群の場合、1 歳魚、2 歳魚、及び 3 歳魚において、前年の 7～11 月の資源密度指数と 1～6 月の資源密度指数の間に相関関係が見られた。令和 4 年度ゴマサバ太平洋系群資源評価によると、2015 年以降、資源全体の SB/SB_{msy} は 1 未満であるため、今回の来遊予測では SB/SB_{msy}<1 の年の年級群における資源密度指数に対する回帰直線で予測を行った（図 2・実線）。

1 歳魚（2023 年級群）について、2024 年 1～6 月の累積資源密度指数は 4,020 とされ、前年 1～6 月の資源密度指数（341）の 1,178%であるが（図 2）、7～11 月の棒受網による漁獲割合は 1.5%であった（図 3）。そのため、来遊量は前年を大きく上回ると考えられるが、予測期間における漁獲の主体とはならないと考えられる。

2 歳魚（2022 年級群）について、2024 年 1～6 月の累積資源密度指数は 2,548 とされ、前年 1～6 月の資源密度指数（2,709）の 94%である（図 3）。2023 年 7～11 月の棒受網による漁獲割合は 24.4%であった（図 3）。そのため、来遊量は前年並と考えられるが、予測期間における漁獲の主体とはならないと考えられる。

3 歳魚（2021 年級群）について、2024 年 1～6 月の累積資源密度指数は 2,689 とされ、前年 1～6 月の資源密度指数（3,442）の 78%である（図 3）。また、2023 年 7～11 月の棒受網による漁獲割合は 41.1%であった（図 3）。そのため来遊量は前年を下回るが、予測期間における漁獲の主体となると考えられる。

4歳（2020年級群）以上について、これまでの予測では4歳以上の残存資源は多くないとしていたが、2021、2022年及び2023年の1～6月の漁獲割合はそれぞれ43.7%、64.6%、33.1%と漁獲の主体であった（図4-1、2、3）。当該期間に漁獲される4歳以上の多くは三陸海域から南下回遊してくる産卵親魚と思われるため、現時点でその来遊量を推定するのは困難であるが、直近3年の傾向から今漁期においても主体となると考えられる。水産研究・教育機構が試算したゴマサバ太平洋系群における2024年1月時点での4歳以上の資源量は、前年より減少傾向にあることから、前年を下回ると考えられる。

以上のことから、年級群の来遊水準は1歳魚は前年を上回る、2～4歳以上は前年並から下回ると予測された。直近3年の傾向から、全体の来遊量は4歳魚以上の来遊量の影響を強く受けると考えられ、年級群毎の予測結果から、全体の来遊量は前年を下回る程度になると考えられた。

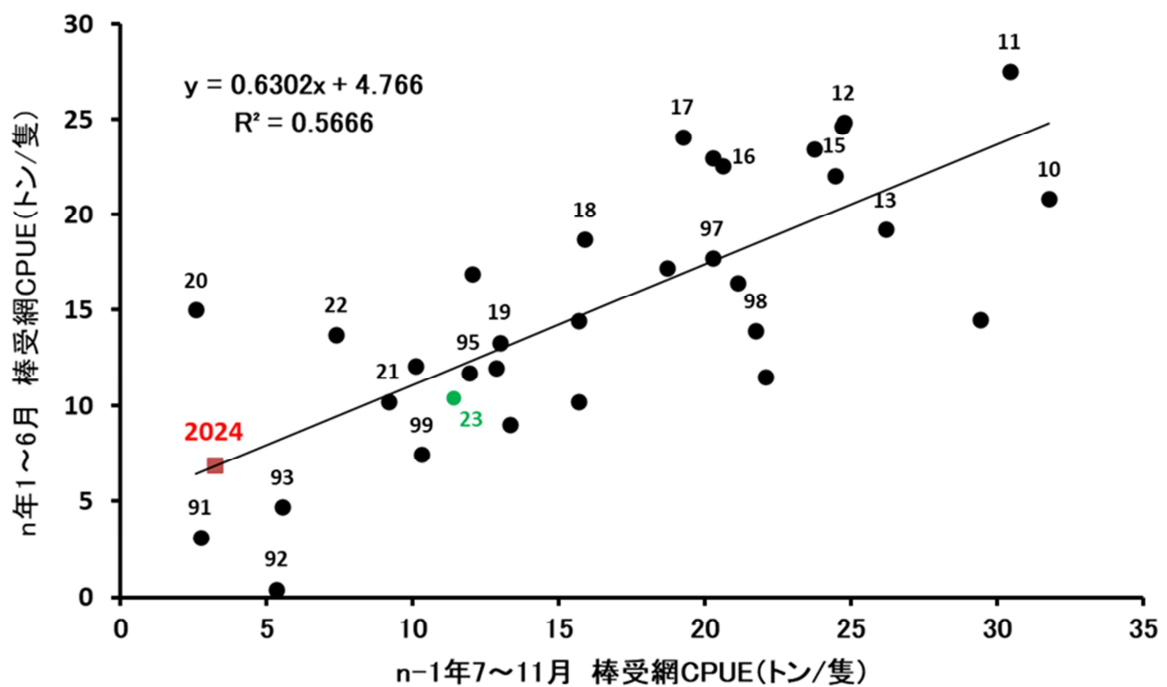
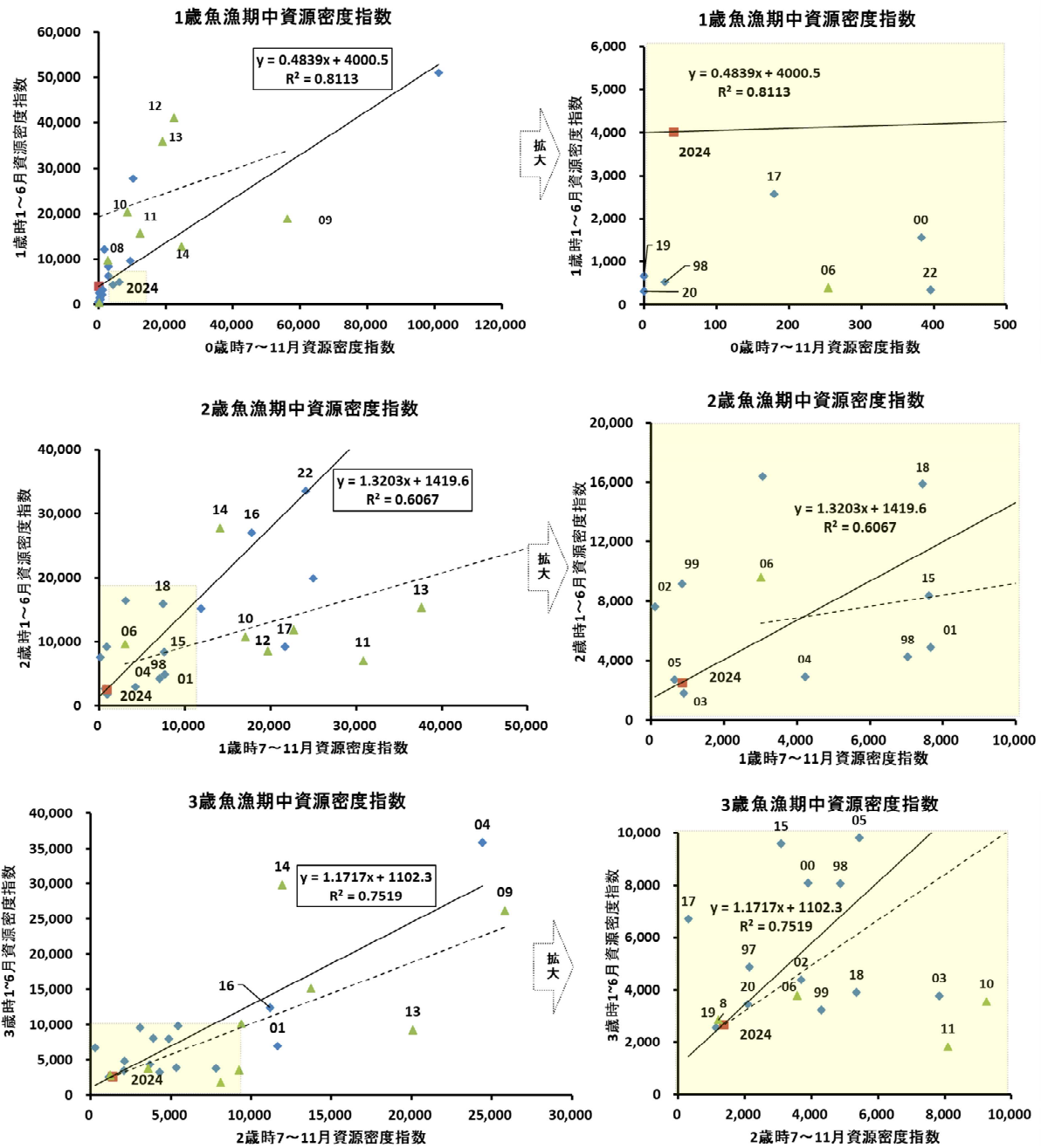


図1 (n-1)年7～11月の棒受網CPUEとn年1～6月の棒受網CPUEとの関係
* 図中の数字は年を示す。



- ◆ …令和4年度資源評価報告書にて $SB/SB_{msy} < 1$ となった年の年級群
- ▲ …令和4年度資源評価報告書にて $SB/SB_{msy} \geq 1$ となった年の年級群

図2 (n-1) 歳時7~11月の累積資源密度指数と、n 歳時1~6月の累積資源密度指数との関係 (図中の数字は年級群)。親魚量 (SB) と期待される漁獲量がMSYを実現する親魚量 (SB_{msy}) の比率 (SB/SB_{msy}) を資源状態を表す指標とし、各年を分類した。回帰直線は $SB/SB_{msy} < 1$ となる年の年級群を対象としている。

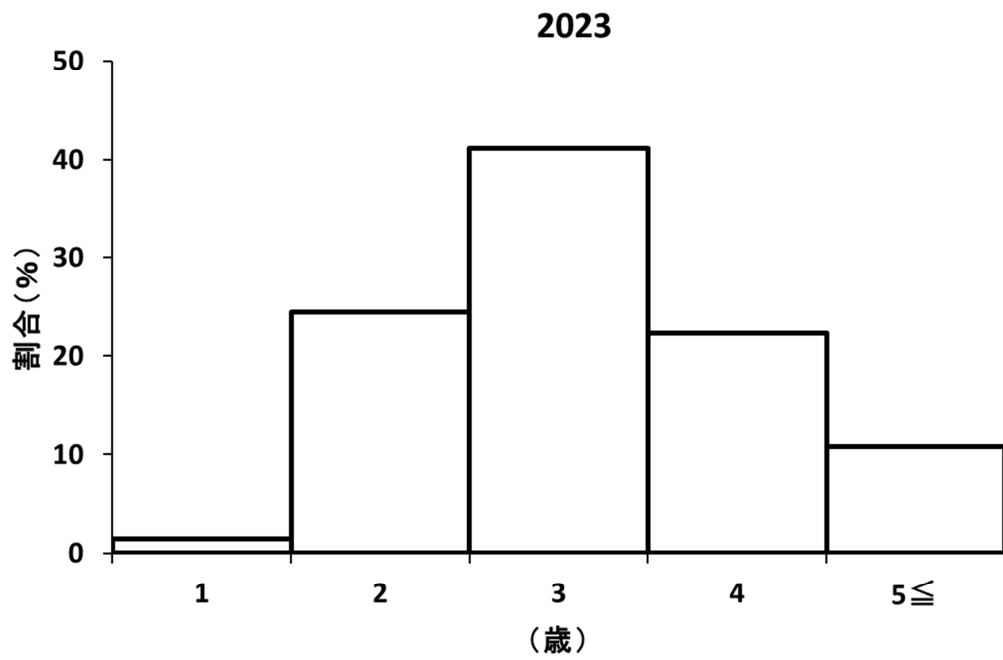


図 3 年齢別漁獲尾数 (2023 年 7~11 月)

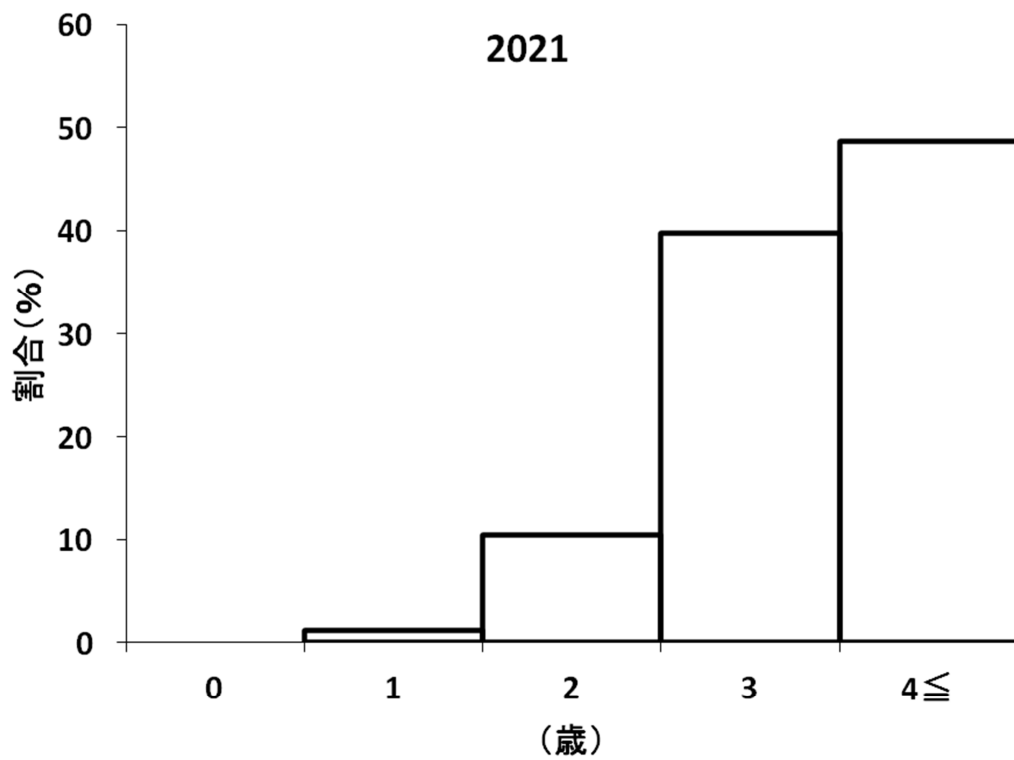


図 4-1 年齢別漁獲尾数 (2021 年 1~6 月)

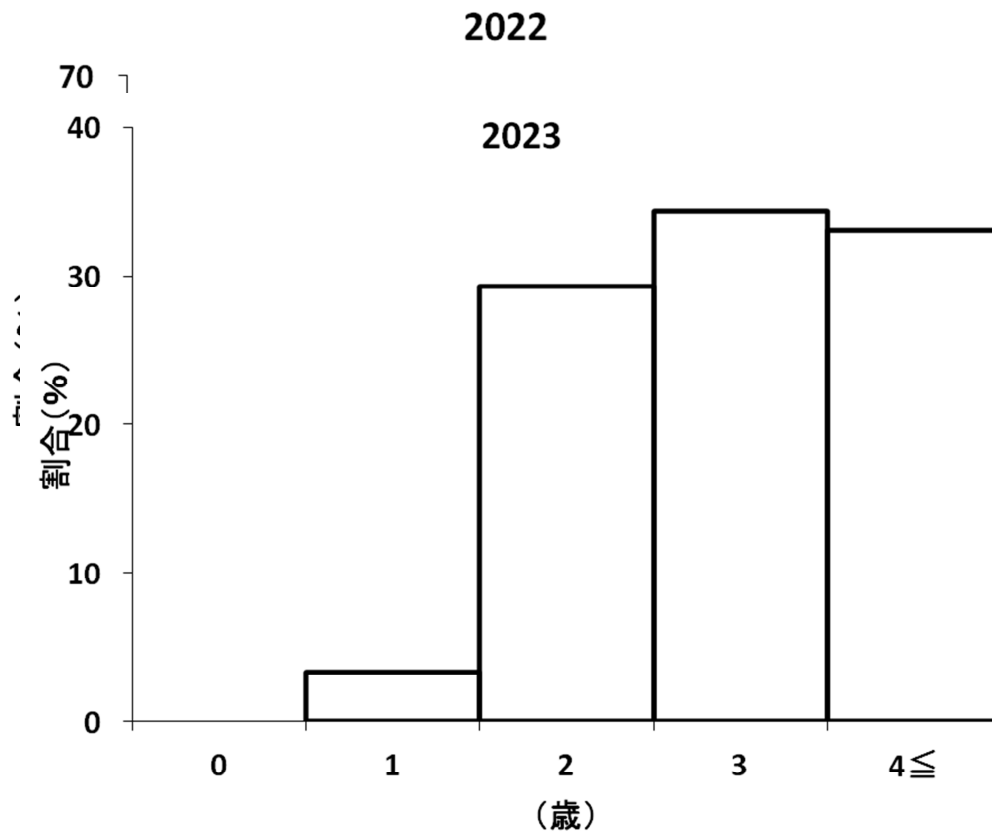


图 4-3 年齢別漁獲尾数 (2023 年 1~6 月)

漁期・漁場

例年では三宅島周辺海域や銭洲周辺海域が主漁場となるが、2023年は黒潮大蛇行により、当該海域周辺が黒潮の影響を強く受けたことで漁場となる機会が極端に少なかったこと、加えて2024年1月以降も黒潮大蛇行が継続することから予測した。

年齢・魚体

年齢については、漁場に来遊する年級群ごとの来遊予測、2023年7～11月の漁獲状況から予測した。魚体については、近年のたもすくい網漁、棒受網漁の年齢別尾叉長モードから予測した。

2 経過と現況(2023年7月以降)

(1) 海況

黒潮は期間を通じA型で推移した。蛇行最南下部から伊豆諸島の西側を北上した後、向きを北東～東に変え三宅島～御蔵島付近を通過することが多く、これに伴い駿河湾や大島西水道へは断続的に暖水が波及した。7月上旬～10月には、断続的に遠州灘沖で蛇行北上部がS字状となり、遠州灘～熊野灘に暖水が波及した。また、7月中旬には一時的に八丈島東方を再南下するW字型の流路となった。房総沖の黒潮は、7月中旬と9月中旬に一時的にやや離岸したが、概ね接岸傾向で推移した。

1月10日現在、黒潮は、御前埼沖から石廊埼沖を北上し、銭洲付近で向きを北東に変え、三宅島付近を通過した後、房総沖を接岸して北東に流れている。漁場水温は、伊豆諸島北部海域は20～21℃、三宅島は21℃、銭洲周辺海域は21.5℃であった。

(2) 漁況

(ア) 秋季まき網漁業

北部まき網による7～11月のさば類水揚量は11,280t(去年同期6,577t)であった。そのうち銚子港のさば類水揚量は6,854t(概数)で、標本重量比から推定した水揚量はマサバが6,399t、ゴマサバが556t(去年同期のさば類水揚量は2,042tで、うちマサバが1,823t、ゴマサバが219t)であった。銚子港への水揚げは12月末時点ではまだ散発的であり、昨年と比べ遅い。11月下旬以降の1投網あたりの平均漁獲量は12.5t(前年11月下旬～12月末:23.8t)であった。

銚子港におけるまき網漁獲物のマサバ・ゴマサバ重量比率は、2023年1月から6月までは94%以上がマサバであった。7月はマサバの比率が78%に、10月は88%に減少したが、8～9月、11月はマサバ主体(99%)となった。7月は犬吠埼沖で漁獲された魚群にゴマサバが2割程度混ざり、10月は常磐南部海域で漁獲された魚群にゴマサバが4割程度混ざった。

漁場は、7～8月は三陸北部海域で形成された。9月は上中旬に鹿島灘沖～犬吠埼沖でわずかに漁場が形成された後、10月上旬までほとんど漁獲がなかった。10月中旬以降、常磐南部海域～犬吠埼沖に漁場が形成され、下旬に鹿島灘沖～犬吠埼沖での漁獲が増加した。11月上旬は犬吠埼沖が主漁場となり、常磐南部海域～鹿島灘沖も漁場と

なった。中旬になると常磐北部海域が主漁場となり、下旬には常磐南部海域～鹿島灘沖に主漁場が移った。12月8日時点で本格的な南下群を対象にした操業にはならず、銚子港への1日3,000トンを超える水揚げはなかった。北部まき網全体でも1日3,000トンを超える水揚げはなかった。

2023年12月の緯度経度5分ごとで集計した漁場水温の平均は18.4℃で、近年で最も高かった（2022年：16.8℃、2021年：15.7℃、2020年：13.5℃、2019年：16.0℃、2018年：17.6℃、2017年：15.3℃、2016年：17.1℃、2015年：15.0℃、2014年：14.7℃、2013年：15.4℃、2012年：16.5℃）。

北部まき網で2023年11月に漁獲されたマサバは、25～31cmの明け2歳魚（2022年級群）～明け4歳魚（2020年級群）が主体となり、32～38cmの明け3歳魚（2021年級群）以上が混じった。

12月は22～29cm前後、体重200g以下の魚体が漁獲の主体であり、南下群と考えられる魚群は漁獲されなかった。

一方、ゴマサバは12月以降北部まき網の漁獲物への混獲は1割程度で終始した。

年明け後は1月9日の晩から操業が始まった。漁場は鹿島灘沖～犬吠埼沖で、北部まき網全体でさば類は167トン（速報値）が水揚げされ、全て銚子漁港へ水揚げされた。千葉県が測定した漁獲物は平均203.5gのマサバ（重量混獲比：67.5%）と平均209.5gのゴマサバ（重量混獲比：32.5%）であった。漁場水温は16.9～17.1℃であった。当日の主対象はマイワシ中羽であり、北部まき網全体で約3,788トン（速報値）が水揚げされたが、マイワシ漁場は常磐北部海域で形成されており、さば類の漁場とは異なった。1投網あたりのさば類漁獲量は3～20トンで、CPUEは低かった。

（イ）沿岸さば釣り

神奈川県主要3港（松輪、三崎、長井）における2023年7～11月の立縄釣り、ビン釣り（通称、かかりサバ）及びハイカラ釣りによるマサバの漁獲量は1.5トンで、前年（9.6トン）を大きく下回る、記録的な不漁となった。ゴマサバの漁獲量は11.5トンで、不漁であった前年（5.5トン）及び過去5年平均（以下、平年）（3.3トン）を上回ったが、2004、2005年や2011～2013年のような50トン前後の好漁に比べれば低調な漁獲となった。

千葉県外房海域では、鴨川市漁協所属船のハイカラ釣りは、前年と同様に12月は出漁していない。

（ウ）定置網

外房沿岸の定置網では、12月下旬までマサバのまとまった漁獲はなかった。

神奈川県主要4港（三崎、長井、佐島、真鶴）における2023年7～11月の定置網によるマサバの漁獲量は167トンで、前年（357トン）を下回り、過去5年平均（363トン）を下回った。ゴマサバ漁獲量は322トンで、前年（109トン）及び平年（186トン）を上回った。

(エ) 静岡県棒受網・たもすくい網

例年、当該期間の三宅島周辺海域における操業は棒受網が主体であるが、黒潮大蛇行による伊豆諸島周辺での黒潮流路の北偏により、伊豆諸島北部海域（以下、「北部海域」という）の利島、大島千波等でゴマサバ漁場が形成されたことから、7月以降もたもすくい網による操業が行われた。7月は北部海域の利島及び御前埼沖に漁場が形成され、CPUE（トン/隻）は上旬が3.3トン、下旬が0.2トンと極めて低調であった。7月中旬は、たもすくい・棒受網共に操業が無かった。7月下旬は御前埼沖に漁場が形成され、全船が棒受網の操業を開始し、CPUEは1.7トンであった。8月上旬も引き続き御前埼沖が漁場となり、CPUEは4.8トンであった。8月下旬になると、北部海域の利島に漁場が形成されたことから、全船がたもすくい網漁業へと転向し、CPUEは5.8トンであった。8月中旬はたもすくい・棒受網共に操業が無かった。9月は利島及び大島千波に漁場が形成され、CPUEは上旬が1.8トン、中旬が9.3トン、下旬が2.6トンであった。10月も引き続き利島及び大島千波に漁場が形成され、CPUEは上旬が0.6トン、中旬が6.3トン、下旬が4.6トンであった。11月は大島千波に漁場が形成され、CPUEは上旬が6.5トン、中旬が8.7トン、下旬が7.7トンであった。12月は大島千波に漁場が形成され、CPUEは上旬が6.3トン、中旬が5.0トンであった。2023年7～12月における静岡県主要4港（沼津、小川、伊東、静浦）におけるさば類の水揚量は、ゴマサバ404トン（前年の40%、平年（直近5年平均）の40%）であった。CPUEは5.7トン（前年同期10.9トン）であった。マサバの水揚量は1トン未満であり、わずかに混じる程度であった。

漁獲されたゴマサバの尾叉長範囲は30～37cmであった。年齢別漁獲尾数の割合は、明け1歳魚（2023年級群）1.5%、明け2歳魚（2022年級群）24.4%、明け3歳魚（2021年級群）41.1%、明け4歳魚（2020年級群）22.3%、明け5歳（2019年級群）以上が10.8%であり、明け3歳魚が漁獲の主体となった（図3）。

(オ) たもすくい網

2023年7～12月における神奈川県主要2港（長井、三崎）には、たもすくい網によるさば類の水揚げはなかった。

2023年11～12月に千葉県民間船によるたもすくい網による操業があった。11月は下旬に3日操業し、16.9トンのゴマサバを漁獲した。12月上旬は4日操業し、37.3トンのゴマサバを漁獲した。12月中旬は4日操業し、30.0トンのゴマサバを漁獲した。

2024年1月8日に千葉県民間船が大島千波海域でたもすくい網で操業し、6.9トンのゴマサバを漁獲した。マサバはわずかに混じる程度であった。

3 漁期前調査結果

(ア) 千葉県

千葉県漁業調査船ふさみ丸は、2023年10月16日、11月14日に勝浦沖及び白浜沖でハイカラ釣りによる調査を実施し、勝浦沖で23～35cm、白浜沖で22～35cmのゴマサバが、白浜沖で27cm及び29cmのマサバが漁獲された。また、2024年1月10日に千倉沖で

ハイカラ釣りによる調査を実施し、22～26cmのゴマサバ主体に22～28cmのマサバが混じって漁獲された。

千葉県漁業調査船千葉丸は、2023年12月5日夜にたもすくい網により調査を行い、ひょうたん瀬で漁獲は皆無であった。

(イ) 神奈川県

神奈川県漁業調査指導船江の島丸による調査は、1月12日現在行われていない。

(ウ) 静岡県

静岡県沿岸・沖合漁業指導調査船駿河丸による調査は、1月12日現在行われていない。